ウィンザーチェア講習会

開催日:2013 年 10 月 5 日(土)午前 10 時～午後 5 時

会場　松本市　長野県工業技術総合センター　環境・情報技術部門大会議室

参加者数　54 名　　報告者　大深靖之

＜講師＞

島崎信　武蔵野美術大学名誉教授　NPO 法人東京・生活デザインミュージアム理事長

山永耕平　九州産業大学名誉教授　FDY 家具デザイン研究所主宰

村田洋子　村田コレクション（安曇野市）

西川栄明　木工ライター・編集者・椅子研究家（北海道）

横山浩司　家具工房楓林舎（大町市）

デニス・ヤング　家具作家（安曇野市）

小島優　椅子作家（兵庫県）

＜進行＞

谷進一郎　信州木工会

＜講演要旨＞

第 1 部 「ウィンザーチェアの歴史とその背景・椅子の歴史におけるウィンザーチェアの重要性・日本独自に発展したウィンザーチェア」

講師:島崎信氏

◆　ウィンザーチェアの歴史とその背景

・ 近代の椅子には3つの源流がある。
　1）イギリスのウィンザーチェア（以下ウィンザー）、2）中国・明代のクァン・イという椅子、3）1850 年代オーストリアのトーネットによる曲げ木の椅子（大量生産を得意とし、1880 年代には他業種を含め世界最大の企業になったことがある）

・ ウィンザーはアメリカに渡りフィラデルフィアウィンザー（アメリカンウィンザー）と、シェーカー教徒によるシェーカーチェアとに発展する。

・ シェーカーチェアのクリエイティブな点は、1）最低限の必要部材で構成され、無駄を極力省いたこと、2）丈夫で座り心地がいい事、3）見た目が美しい事。

・ ウィンザーのルーツはイギリス中世の庶民の生活の中から必要に迫られて発生してきたもの。美術館や博物館に残っている物は、権力者の所有物や貴重な材料を使った物であり、機能性や経済性が見られず、椅子のデザインの主流ではない。

◆　椅子の歴史におけるウィンザーチェアの重要性

・ 近代の名作椅子を作ったデザイナー達は自分の作風を確立する前にウィンザータイプかシェーカータイプの椅子を作っていることが多い。

・ イギリスでは、産業革命以降の人口増加に伴い、丈夫で安い椅子が必要となったため、各地域でパーツを製造し、ロンドン近郊のハイウィッカム工業地帯で組み立てる分業の産業構造ができあがった。

・ 1910～20 年代頃に成長した家具メーカーは必ずウィンザータイプの椅子を作っている。各メーカーは上記のような分業システムを自社工場内で行い、1人の職人が 1 脚全てを作るスタイルからの転換をした。

・ 作り手はその物が生まれてきた背景にも関心をもち、本質を見なければいけない。過去に作られた物の中から、伝承するに値する物や自分に響く物を見いだすことが創造の芽となる。それをいかに今日の技術と生活の中に溶け込ませ、美的感覚も伴わせるかが重要である。

◆　日本独自に発展したウィンザーチェア

・ 民藝の実際の実践者は池田三四郎と吉田璋也の 2 人だけである。

・ 濱田庄司や河井寛次郎は、民藝運動時すでに作家であり、柳宗悦の思想を信奉して創作活動等をしていたかは疑問である。

・ 吉田璋也は鳥取を中心に小売店や美術館を作るなどして民藝運動を行った。松本の池田三四郎は、ウィンザーのデッドコピーを作ろうとした。それにより次なる創造に向けての伝承ができると考えた。

・ 創造は模倣から始まるが、家具ばかりの視点だけでなく、その時代の生活デザインや周辺の事も吸収する必要がある。伝承なくして創造は生まれない。

第 2 部 「村田コレクションについて」

講師：村田洋子氏

◆　生活工芸資料館ができるまで

・ 青春時代は戦時中で、いかに生きるかという命題について、夫である故村田新蔵は哲学書の中に、洋子さんは西洋文学の中に答えを見いだした。その後、新蔵氏はヨーロッパ庶民の生活道具の中に真理があるのではないかと考え、生活道具全般を蒐集しようと思いたった。 2つの大戦によってヨーロッパは疲弊していることもあり、庶民の物は残されていない状況であった。購入しようにも希少価値が高くなっており、金銭面で苦労したが、

1973 年に埼玉県春日部市に生活工芸資料館をオープンする事ができた。

・ 生活に関わった道具についてはそれらが使われた場所に展示する「生活の再現」を目指した。キズ1つにも家族におけるドラマがあり、未だに何かを語りかけてくることを多くの人に感じてほしかった。結果的に、著名人、芸術家から一般の主婦に至るまで多くの方に愛される資料館となった。

◆ 春日部市からの豊科町（現安曇野市）への移転について

・ 春日部市の区画整理事業に伴い移転計画がおこる。様々なところから呼びかけがあったが、多くの支援者と相談し、最終的に豊科町に決定。

・ 現在ある蒐集品 4000 点のうち多くは坂田和實氏に依頼し、海外で買い付けを行った物。氏との巡り合わせによってこれほどの物を蒐集することができた。

・ 転居時におきた豊科町との間のトラブルにより、多くの資料が未だに公開できない状態である。「今後、皆様のご理解を頂いて、お役にたてる事が出来るならば展示したいと願っている。」

第 3 部 「ウィンザーチェアの製作工程と道具」

講師：山永耕平氏

◆ ウィンザーへの取り組み

・ 九州産業大学在職中にイングリッシュ・ウィンザーについて研究を行った。また、イギリスのスチュアート・リンフォード社等の家具メーカーや大学における製作体験により、20 年を費やして様々なタイプのウインザーチェアを実測し比較図面を作成した。

・ イングリッシュ・ウィンザーの特徴は、1.座板がニレの 1 枚板であること。2.座板がサドル型に深く彫られている事。3.座板の厚みが 40 ミリ以上ある事。

・ 現在のテーマは、日本の木を代表するヒノキを使い現代生活にマッチさせること。

◆ 製作について

・ 曲げ木の治具から外した材は密閉した室内に入れ、除湿機により1週間ほど乾燥させたほうが良い。

・ レプリカを作る場合は、写真から寸法を割り出す。仕口については独自に試行錯誤して作っているが、家具メーカーにおける製作体験が無ければ作り方が分からなかった部分もある。座板の材には、ニレの入手が困難になっている為クスを使っている。クスは匂いがかなりキツいが、ニレよりも削りやすい。

・ 日本の臼彫りチョウナやモッタを使っての座彫りを試みている。手道具を使うと木と直接対話できることが利点。
・ 粗彫りでは木目に対し垂直方向で削り、仕上げ彫りでは木目に対して平行に削る。これらの道具を使い、昔は座彫りに2日かけていたが現在は半日かからなくなった。

◆ 質疑応答 「ウィンザーには通しホゾで作られた物と止めホゾで作られたものがあるが、どのような理由で選択されたのか」

山永氏による解説
・ 時代的には、ゴールドスミスチェアは止めホゾ、それ以降のウィンザーは通しホゾ。
・ 日本の場合は一度打ち込むと抜けないほどキツいホゾを作るが、西洋では仮組みできる程度に緩い。そのため通しホゾ＋割り楔の構造になったのではないか。

デニス・ヤング氏による解説
・ 19世紀～20世紀は座板にニレを使うことが多かった。ニレは割れにくいため、ホゾ穴がかなり外側であっても、楔を強く打ち込んでも割れない。
・ 座板の厚みによっても強度が変わるし、色々な理由があると思うが、工房のアイデアや作る人の考えで構造は決まっていったのではないか。

第 4 部「国内に所蔵されている名品解説とイギリス訪問報告」

講師：西川栄明氏

◆ 国内に所蔵されているウィンザーについて
・ 村田コレクションは、単独でウィンザーが網羅できる程の国内最高レベルのコレクション。
・ 益子参考館（栃木県芳賀郡）のウィンザーは公開されており、実際に座ることができる。家具の博物館（東京都昭島市）も公開はしている。松本民藝生活館（長野県松本市）は完全非公開。
・ 日本民藝館（東京都目黒区）は十数脚所蔵、そのうちほとんどは濱田庄司が蒐集した物。1 脚のコムバックチェアのみ坂田和實がヨーロッパから持ち帰ったもの。
・ 村田コレクションのうち、「子供椅子」は完成度が高く特に素晴らしいもの。「スローンチェア」は 13～16 世紀に作られた由緒正しい椅子で、書籍「Oak Furniture, the British Tradition」に掲載されている椅子と全く同じもの。当時の購入額でもこの 1 脚で車 1 台買えたほど。

◆　イギリス訪問の報告

2013 年9月にウィンザーゆかりの地を訪問した際の写真をプロジェクターで映してのお話。

□ ウェールズ民族博物館

・ 古い農家の生活を再現した建物がある。曲げ木でなく継いで削り出して作られたスティックバックチェアや、収納と睡眠と腰掛けを兼用する用途のチェストなどが展示してある。

□ チェアミュージアム（ハイウィッカム）

・ 現在は展示数が少ないが、おまるタイプの椅子や腰に剣を下げたまま座るタイプなどの珍しい椅子が展示してある。

□ スチュアート・リンフォード社（ハイウィッカム）

・ 現在は椅子の修復やウィンザー以外の家具製造をメインに行っているが、全盛期は（ハイウィッカム全体で）1 日 4700 脚を製造していた、現在は（アーコール社は別として）1 日 1 脚程度しか製造されていない。（デニス・ヤング氏はこの会社の設立当初に努めていたが、当時は豚小屋のようであったと言う。）

□ 旧ハイウィッカム市庁舎

・ ハイウィッカムに貢献した人や事業で成功した人を讃える為にステンドグラスに人物像が描かれている。これを見ると、当時この町にウィンザーチェアがいかに貢献していたかが分かる。

□ ウィンザー城

・ ウィンザーチェアの名前の由来は、諸説あるが、ロンドンの人達にとっての「ウィンザーのほうから来た椅子」という説が有力。

□ シャーウッドの森（ノッティンガムシャー州）

・ 当時、周辺地域はこの森から伐採された木を椅子に使っていた。伐採しすぎたため現在は植林をしている。

◆　ウィンザー製作に関する古い映像資料

・ 1940 年頃の映像　山の中での作業でグリーンウッドワークそのもの。足踏み旋盤などを使っている。

・ 1940 年代後半の映像　最後のボッジャー（挽物師）と言われるディーン兄弟の作業の様子。

・ 1970 年代アーコール社の宣伝用映像　分業体制で大量生産をしている様子。（凄まじい速さの仕事で、会場内からどよめきが起きるくらい衝撃的な映像でした。）

第 5 部 「木工作家によるウィンザーチェア」

講師　谷進一郎氏

村上富朗氏についてのお話

- 10 代半ばより家業の手伝いをしており、20 代の頃にはすでに腕の良い職人であった。
- 20 代半ばにアメリカのフィラデルフィアに渡りウィンザーを独自に勉強する。
- 30 代半ばにして完成度の高い様々なタイプのウィンザーを製作しており、東京では個展を開き世間の注目を集めた。
- 谷氏とは 30 年以上の付き合いであった。講習会の会場内には谷氏の自宅で 20 数年使っている拭き漆の椅子（ウィンザーチェア大全に掲載）が展示された。谷氏と奥様は身長差が 20 センチ近くあるが、どちらが座っても座り心地が良い。通常使う人の体格に合わせて座面高や傾斜角を変えて作ることが多いので、どのようにしてこの椅子の座り心地を割り出したのかは不明である。
- 村上氏はアメリカンウィンザーというスタイルで製作していたが、そのスタイルに忠実というわけではなかった。全体のバランスを保ちつつ、日本人の体形に合わせて作っていた。通常アメリカンウィンザーの座板はパインなどの柔らかい材を使用するが、氏はナラなどの硬い木を使う。また、アメリカンウィンザーはペイントして木地を隠すが、氏はオイルフィニッシュや拭き漆を施し、木地を生かす方法をとった。
- 再度の渡米の折、現地のアーティスト達のオリジナリティのある仕事に触れて以来、木の座板にはこだわりながらも様々なタイプの椅子を発表するようになる。中でもロッキングチェアーは大人気であった。
- 末期癌が発見された時には既に余命半年であったが、村上氏の友人である建築家・中村好文氏が記録映像の制作を企画した。村上氏は体調が悪い中取り組み、生涯最後の椅子を作る様子が収められた DVD が完成した。この DVD には曲げ木をする過程は収められていないが、別の機会に谷氏が撮影した映像が youtube にアップロードされており、視聴することができる。
- 2011 年 6 月、村上氏の生涯の夢であった「木の椅子 100 展」を開催。これは、谷氏を初め周りの木工家や友人達が村上氏の為に企画した 1 日だけの展示会。皆で協力し、個人のお客さんの家を周って 100 脚以上を集めた。
- 「ウィンザーチェアの名手」と言われた村上氏は、2011 年 7 月に胃癌により 62 歳で亡くなるまでに 300～400 脚の椅子を製作した。

講師：横山浩司氏

- 約 40 年前に松本民芸家具に入社。民芸生活館で生活しながらの修業を5年間続ける。

- 朝は5時 45 分に太鼓の音で起床し、三四郎氏が世界中から集めた家具を磨きあげる作業や館内の掃除をお盆と正月以外毎日させられた。そのような作業には、理屈では無く「感じる」物の見方を養って欲しいという三四郎氏の意図があったのではないか。
- 三四郎氏は民藝について語る事はほとんど無かった。簡素な生活を心がけさせられたが、身の回りに使う物は三四郎氏の目にかなった物を使っていた。
- 松本民芸時代に製作した家具はテーブルと椅子がほとんどで、椅子は安いものを中心に1000 脚近く作った。
- 民芸時代には、曲げ木は蒸し曲げで行われていたが、現在自分の工房では積層曲げで行う。積層曲げの利点は、簡単に作業ができ、治具製作に費用があまりかからないこと。曲げた翌日には型から外すことができ、形の修正もしやすい。
- 積層曲げの材は昇降盤で割いた厚さ 3 ミリの材を使う。接着剤はピーアイボンド。
- 通常 20 脚前後をまとめて作っている。座板の粗彫りでは 1 日 10 脚以上をこなすスピードで仕事をしている。
- デニス・ヤング氏から教わったこととして。脚周りを組み立てる際、貫をわざと長く作り、強いテンションをかけた状態で組み立てる方法。ウィンザーの強さはそこにあるという。逆に松本民芸時代では、ボンド溜まりを作るため貫を若干短く作っていた。
- 今後は参考になるような伝統的な椅子を作りたいが、これからの人達には新しいタイプの椅子を作ってもらいたい。

講師：デニス・ヤング氏

- 約 40 年前にアメリカから来日し松本民芸家具に入社。民芸生活館で生活しながらの修業を 4 年間続ける。その後イギリス・ハイウィッカムに渡り伝統的な家具作りを学ぶ。
- イギリスではバーナード・リーチ氏に出会い食事をする機会を得たことがある。リーチ氏はハートフルで素晴らしい人であった。リーチ氏に「物の美しさはどうすれば分かるのか？」と質問したところ、「人間の美しさが分かれば、物の美しさが分かるだろう」と答えられた。
- 村上富朗氏は穏やかで心の温かい素晴らしい人であった。村上氏の仕事には氏の美しさが現れている。
- ハイウィッカムでは、椅子作りの工房を探してまわったが、伝統的な方法で製作している工房はほとんど無くなっていた。
- ウィンザーは田舎の生活文化から発生したもの。しかし、都会的なファッションセンスやスタイルを家に取り入れたいと思うニーズが高まり、ウィンザーのデザインの幅を広げた。
- イギリスではそれぞれ性格の異なる2カ所の工房で働いた。1つはウィンザーを作る工房。

１人で全部を作る事は無く分業をしていた。もう1つはベストチェアメイカーの工房。社会的ステイタスを持っており、高度な技術を必要とする仕事ではあったが、そこではウィンザーではなく、張り座の椅子（ジョージアン様式の椅子）を製作していた。

- イギリスから帰って来た当初は、イギリスの影響を受けた椅子を作っていたが、少しずつオリジナリティを出すようになった。しかし、ベースとなっている物は伝統的なスタイルの椅子である。
- イギリスの手道具はウィンザーに特化している物があり、それらを使ったほうが速く作業ができる。

講師：小島優氏

- 17 歳のときに渡英。イギリスの椅子職人に師事する。それ以来 20 数年椅子をつくっている。
- 座板の粗彫りにはチョウナを使う。スツールの場合、粗彫りは 15 分ほどでできる。
- 塗装は、オリジナルの着色剤を作り着色→シュラック→ビーズワックス。組み立ては塗装後に行う。
- ギャラリーやデパートでの展示会や委託販売など、出来る限りの事はしてきたが、最近は販売目的でない作品を製作し、公募展にも出品している。それによって今までに無い横の繋がりができ、自分にとってプラスになる事が多くなった。どんな形であれ、作品を表に出し、そこで出会った人達からの意見を大事にして謙虚に頑張っていけば良いと思う。
- 伝統的な椅子からインスパイアされて新しい椅子を産み出すことはとても大事な事。
- （西川氏による補足）小島氏の父は螺鈿細工などの工芸家で黒田辰秋の弟子。中学生の時から父の手伝いをしていた。また、10 代の頃から骨董屋に出入りし、物を見る目を養っていた。
-

講師：島崎信氏　　今回の講習会を振り返って

- 自分の創作だけでなく、時代の動きにあわせ、生活に裏付けのあるニーズや機能から新しいものが生まれてくるという事をもう一度見つめて頂きたい。
- 民衆芸術の視点＝アノニマスなデザインは重要である。現在、デザインというと、個性の表現と思われているが、20 世紀後半からその思想で進んで来た為に本質的なことが失われてきている。
- 作る事、考える事、販売を分業で行ってはいけない。21 世紀はデザイナーがデザインだけを考えていては生きて いけない時代。水平方向で関係する事が動いていくプロセスを視野に入れながらやっていかなければならない。

ウィンザーチェア講習会の会場の様子